

第7回日本国際小児保健学会学術大会 2023 開催報告

吉松 昌司

姫路聖マリア病院 小児科・重度障害総合支援センタールルド

I. 緒言

SDGs, No one left behind ということ、過去の日本国際小児保健学会 (JICHA) 大会もキーワードに掲げてきた。そして今回は、「各国の障害児・者の生活と海外協力」をテーマとした。障害児・者は、その精神・身体的特徴のゆえに生きづらさを体験するが、社会の仕組み次第で、生きづらさが軽減され、生活はより豊かなものになる。基調講演として、長年 障害児・者の支援をされている日本キリスト教海外医療協力会 (JOCS) の常務理事 大友 宣先生をお招きし、「障害児・者といっしょに生きる」というテーマでご講演頂いた。JOCS は日本で最初の海外医療協力を始めた NGO である。2020 年から始まったコロナ禍で、私たちは活動を制限されてきた。そして、2023 年春より、日本でもやっと様々な制限が解除され、あらゆる活動が再開された。しかし、コロナ禍以前に戻ったわけではなく、新しい時代の幕が開けたようである。そういう時代であるからこそ、改めてなぜ私たちが海外医療協力に、また 障害児者に関わるのかという根本的な問い、WHY についてご講演頂いた。さらに、シンポジウムでは、「障害児・者への支援と海外医療協力の可能性」というテーマで 日本、ベトナム、ケニアでご活躍中の先生方々から、各国の現状並びに課題などについてご講演頂いた。限られた時間ではあったが、学びの多い講演と討議を行うことができた。

今回は、3 年ぶりに、対面を再開、かつハイブリッドでの初めての開催で、不備もあったが、演者

と参加者の皆様のおかげで素晴らしい大会となった。

II. 学術大会概要

1. 基調講演 JOCS 常務理事 大友 宣氏

座長：姫路聖マリア病院 小児科 吉松 昌司氏
「障害児・者といっしょに生きる」

～日本の NGO として、JOCS の歴史・現在・今後なぜ JOCS が障害児者に関わってきたのか・関わるのか？～

JOCS の発足の歴史、現在の活動について、JOCS の使命やビジョンを交えながら、ご講演頂いた。続いて、社会福祉制度のあり方などについて語られ後、サイモン・シネックのゴールデンサークルを用いながら、参加者に Why の問いを残され、ご講演を締められた。

2. 一般演題 座長：三重県医療保健部

栗原 康輔氏

3 演題のうち 1 演題は、オンラインを通しベトナムからご発表頂いた。詳細は投稿論文をご参照頂きたい。

2-1. コロナ禍における渡航者外来受診小児の動向

佐久総合病院小児科 兼 国際保健医療科
坂本昌彦氏

2-2. 鎌状赤血球症男子の診療からみる国内診療の強みと弱み

埼玉医科大学国際医療センター小児腫瘍科

福島 敬氏

2-3. Strategies of patient attraction and rehabilitation approaches at Thai Nguyen General National Hospital in Viet Nam

Thai Nguyen General National Hospital,
Ha Nguyen 氏

3. シンポジウム

座長：川崎医科大学 総合医療センター

小児科 田中 孝明氏

姫路聖マリア病院

小児科 吉松 昌司氏

テーマ：「障害児・者への支援と海外医療協力の可能性」

なぜ私たちが海外医療協力を、また障害児者に関わるのかという根本的な問いを探られた基調講演に続き、日本・ベトナム・ケニアでご活躍中の先生方々から、各国の障害児者の置かれている現状並びに支援などの課題などについて、現場からの声としてご講演頂いた。限られた時間ではあったが、学びの多い講演と討議を行うことができた。

3-1. 姫路聖マリア病院 小児科、重度障害総合支援センタールルドセンター長宮田 広善氏

「日本の障害児・者の現状」～「我が国の障害児・者福祉の現状と課題」～

難解な我が国における社会福祉制度発展の歴史を、第二次世界大戦後から分かりやすくご説明頂いた。それに続き、飛躍的に発展してきた障害福祉制度と教育制度の課題として、制度の発展とサービス量の増加に伴い、障害児を一般社会の中に包含していく「インクルージョン」の流れに反し

て、地域の子ども達から離されて行くという状況や、教育分野でも「通常学級でも支援が必要な子には支援する」というキャッチフレーズで登場した特別支援教育への移行後、逆に特別支援学校や特別支援学級の在籍児が 2.5 倍と急増している現状を挙げられた。その背景として、人権意識の乏しい日本社会の問題を示された。

3-2. 姫路聖マリア病院 作業療法士 ユーテータン氏

「ベトナムの現状と日本でベトナム人作業療法士として働く動機や展望」

ご講演の初めに、なぜ日本で作業療法士になることを志し、実際にご苦労されたかを述べられた。その後、母国であるベトナムの医療状況、特にリハビリテーションの現場・教育制度・支援状況などを説明された。最後に、今後の目標として、「医療施設及び医療制度が充実している日本で作業療法士として働く体験を活かし、ベトナムの現地で働いているセラピストらと協力し、母国における作業療法士の専門性のみならず、医療チームの重要性を普及し、地域に暮らしている患者・障害児・者への支援を行っていきたい」とご講演を締められた。

3-3. ベトナムの子ども達を支援する会事務局長 / 国際母子手帳委員会事務局長

板東 あけみ氏

「ベトナムの障害児・者の現状と日本の低出生体重児のケア体制」

「ベトナムの子ども達を支援する会」と板東氏の

活動についてご講演頂いた。同会は、ベトナムの現地関係機関と協働で障害の予防・早期発見・早期介入を、医療と教育と福祉と地域という視点で実施してこられた。ご講演ではこの夏に行われた6つの研修コースを具体例として挙げられた。板東先生や同会は、ベトナムでの活動に留まらず日本においても精力的に活動されており、低出生体重児の家族において、母親の強い自責の念や不安や孤独の解決を大きな課題と考え、総称リトルベビーハンドブックを作成し、日本やベトナムでの普及に取り組んでおられる。障害児・者とそのご家族に寄り添った活動に非常に感銘を受けた。

3-4. シロアムの園 代表 公文 和子氏

「ケニアの障害児者の状況とニーズ」

まず、ご自身の経歴を紹介されながら、どのようにケニアの障害児・者と出会い、そしてシロアムの園開設に至ったのかを示された。さらに、ケニアの障害児・者への取り組みなどの現状について述べられ、ケニアの社会において、シロアムの園の理念と活動や今後の展開についてご発表頂いた。参加者にとって、目標・チャレンジを与えるご講演であった。

III. 結後

世界各地で紛争、コロナ禍を含めた自然災害などで、世界情勢が大きく変化する時代に、様々な国・立場の演者の方々より、活動の動機からその内容まで幅広いご講演を頂いた。手作り学会であるための不手際も見られたが、JICHAであるからこそできた「いっしょに生きる」大会であった。

IV. 謝辞

ご多忙の中、ご講演頂いた講師の皆様、ご参加頂きました皆様、当日の準備に多くの労力を提供頂いた姫路聖マリア病院のスタッフ皆様、JICHA スタッフに、厚く御礼申し上げます。